

氏 名：内田 朋子

学位の種類：博士（看護学）

学位記番号：甲第 235 号

学位授与年月日：2023 年 3 月 10 日

学位授与の要件：学位規則第 4 条第 1 項該当

論文審査委員：主査 奥 裕美（聖路加国際大学教授）

副査 片岡 弥恵子（聖路加国際大学教授）

副査 五十嵐 ゆかり（聖路加国際大学准教授）

副査 白石 和子（東京女子医科大学看護専門学校・副主事）

論文題目：分娩中の硬膜外麻酔使用に関する妊婦と助産師の共有意思決定支援の
実装

博士論文審査結果

近年日本においても硬膜外鎮痛法による無痛分娩が普及しつつあるなか、妊婦が適切な情報を得て選択するための意思決定を支援することが喫緊の課題になっている。そこで本プロジェクト研究は、AHRQ (Agency for Healthcare Research and Quality) の The SHARE Approach に基づいた無痛分娩の共有意思決定プログラムを A 大学病院母子総合医療センターにて導入し、分娩中の硬膜外麻酔使用に対する妊婦と医療者間の共有意思決定支援の質を向上させることを目的として実施された。

実装戦略として、ステークホルダーとの協働関係の構築、マザーズブック等の実装ツールの決定、スタッフトレ、一ニング、技術支援、監査とフィードバックを用い、PDCA サイクルに基づく質改善(QI)アプローチを実施した。実装アウトカムとして、QI 指標の到達度、忠実度、実行可能性、適切性、受容性を 1 か月毎に評価した。妊産婦への成果として、硬膜外麻酔分娩の知識、意思決定の葛藤、希望する産痛緩和法になった割合、出産経験に対する満足度の 4 項目を評価した。

結果、10 名の助産師がトレーニングを受け、妊婦 16 名に共有意思決定プログラムを提供した。プログラム後の妊婦の知識テストの平均点は向上し ($t = 4.41$, $p = 0.001$)、意思決定の葛藤は低減した (SURE Test4 点)。出産経験に対する満足度は増加しなかったものの、全ての妊婦が希望した産痛緩和法で出産することができた。

審査では COVID・19 感染症の拡大の影響など、プロジェクト計画前とは大きく異なる A 病院、そして周産期医療を取り巻く状況の中で、実装チームの中心となり新しいプログラムを導入したことは、研究者の卓越した実践能力を示すものであるとして高く評価された。一方、実装チームメンバーや対象助産師の選定理由、相談を受けた妊婦の相談回数の違いの理由、実装戦略であるマザーズブックやアプリケーションソフトの具体的な内容や使用方法、プロジェクト実施中の医師との協働の状況について明確に記載しその結果を考察すること、今後のプロジェクト継続に向けた多職種チームの構築、特に医師との協働について実現可能性を踏まえて検討した内容も考察に加筆すること、研究方法に合ったタイトルに修正することの必要性が指摘された。

修正後の論文では、上記の点について適切に修正されていることを審査員で確認した妊娠出産における女性への意思決定支援は、出産、育児への肯定的な感情や姿勢に影響する。本研究は妊婦の意思決定支援に助産師が積極的に関わることで、妊婦の出産経験に肯定的な影響を及ぼすことを支持したうえ、不足する産科・麻酔科医師からの業務の移行、

タスクシェアにもつながる可能性を示唆しており、今後の発展が大いに期待される。

以上により、本論文は本学学位規定第 5 条に定める博士(看護学)の学位を授与することに値するものであり、申請者は看護学における研究活動を自立して行うことに必要な高度な研究能力と豊かな学識を有すると認め、論文審査ならびに最終試験に合格と判断する。